

明治期の大阪の雑誌

—「大阪文芸」細目—

—

河合醉茗は「明治三十年代の大阪—この頃の世相と文芸雑誌—」（『京阪百話』昭和8年7月17日発行、日東書院）の中で、明治中期の大阪の文学活動について、次のように回顧している。

二十四年五年頃には大阪の文学も明治年代初めての全盛を見せた。勿論中央文壇の刺戟もあつただらうが、一つの文化的運動が未だ地方的分野に拠つて立ち得た時代であつたからでもあらう。〈中略〉『大阪朝日』と『大阪毎日』とに關係ある文芸家が、それ／＼対立して新聞以外の機関を有し、相対抗して氣勢を揚げたのである。『だいてう大朝』側では、二十四年四月に『なにはがた』を創刊した。〈中略〉此の『な

荒井 真理亜

にはがた』の集団は浪華文学会と云ふ名の下に三四十人の名を列ねてゐた。これに対して『だいてう大毎』派は大阪文芸会なる名の下に略ほ同数の社中を揃へ、機関誌『大阪文芸』を同じく二十四年十月から続刊した。

大阪の文学が「初めての全盛を見せた」明治二十四、五年は、大阪で創刊された二大新聞、すなわち「大阪朝日新聞」と「大阪毎日新聞」の關係者が中心となつて、新聞以外の機関を興し、雑誌を發行して、大阪の文学を盛り上げたのである。

この時期、新聞人が文学活動に積極的になつたのは、新聞社が経営、人材ともに充実してきたからだと考えられる。

明治二十二年、東海道線が全通して輸送経路が確保されたことで、大阪の新聞社は地方読者を開拓し、發行部数を延ばした。

明治二十三年、大阪朝日新聞社に名文家として知られていた西村天囚が入社した。この西村天囚を中心に明治二十四年に発足したのが、浪華文学会である。また、大阪朝日新聞社は、明治二十五年にマリノニ式輪転機を導入し、発行部数をさらに延ばして急成長を遂げたのである。

一方、大阪毎日新聞社は発行部数では「大阪朝日新聞」に遅れをとるものの、明治二十一年に「都新聞」から渡辺治を社長に迎え、社内改革と紙面の刷新を試みた。特に、渡辺は、記者の見聞を広めると同時に、記者の社会的地位を高めようと、記者が自分で取材に行き、記事を書くようにさせた。さらに、海外的新刊書を買入れ入れて記者に読ませ、研究会を開かせ、週一回ずつ当番を作って市内や府下で公開講演会を催し、世人を啓発するとともに、記者もまた学者に劣るものではないことを認識させるよう努めたのである。また、明治二十二年、「都新聞」で新聞記者をしていた木内愛溪が「大阪毎日新聞」に入社した。明治二十三年には「大阪朝日新聞」を詐欺取材犯嫌疑で解雇された宇田川文海が入社し、続き物に筆を揮った。そして、木内愛溪や宇田川文海ら大阪毎日新聞で活躍していた人たちが中心となって興したのが、大阪文芸会だったのである。

このように、新聞社の発展を背景に、新聞記者自身も文筆に

対する意識が高まり、文学会の結成や雑誌の発行などの文学活動につながっていったのではないだろうか。

二

「大阪文芸」は、明治二十四年十月十九日に第一号が発刊された。月二回発行され、明治二十五年二月一日の八号をもって廃刊となった。

「大阪文芸」は四六版で、実寸は縦二十一糎・横十五糎である。一号は六十一頁で、二号以降もだいたい六十頁で編まれている。定価は一号から八号まで、一律七銭。表紙絵は、一号から五号までは鈴木蓄齋、六号から八号までは亀一山のデザインが採用されている。

編集人は金子福次郎、発行兼印刷人は菅原喜一郎である。発行所は大阪市東区道修町二丁目二十四番邸の大阪文芸社、事務所は東区平野五丁目二十五番邸の菅原好文堂、印刷所は大阪国文社となっている。

一号に掲載された「口上」には、「大阪文芸」の発刊のいきさつについて次のようにある。

当時大阪の文芸社会に羽ばたきなせる天狗共が、類は友も
て集りたる其会合をば、事仰山にも大阪文芸会とこそ名付
けたれ、さるほどに之れに馳せ集りたる面々は、無くて七
癖、有つて四十八癖の外に、猶ほ一癖づゝある輩なれば、
何が扱て会合の度ごとには、鞍馬の山の夫れにはあらね
ど、大天狗、小天狗、太郎坊に次郎坊、小桜坊、羽衣坊、
偕ては鬼鹿毛坊なんどまでが、鼻高々と相詰むれば、法螺
の吹合かまびすしく、羽扇ならぬ舌頭の戦ひいとも目覚し
けれど、毎も其席限りの空談に流れ、ヘイ左様なら又次会
にと分袂て仕舞ば、峰の霞ともろともに、消へて影だに残
らぬなり、ア、何うも是れでは困まる、折角あれほどに調
べたものを、一夕の空談に流すは惜いものだ、お負けに寄
つてたかつて嘲諷了とは情なしと、一人が詫てば、如何に
も御尤、僕が意匠惨憺、苦心を凝らせしあの文章こそ、是
非とも世間の具眼者に見て貰ひたく思ふのぢやと、他の一
人が言ふ、夫れには機関の文学雑誌を発売しては何だら
う、其事々々僕も大ひに賛成だ、拙者も同意で御座ると、
話忽まち一決して、扱てこそ茲に大阪文芸と云ふ紙よごし
が現はれたれ、右の次第なれば、木の葉ながらも銘々が、
腕かぎり根かぎり、智恵囊から絞り出して、何卒御覧下さ

れとて、お目にかけます次第なれば、文は名文ならぬまで
も、一字一句にも念を入れ、趣向は妙案ならぬまでも、工
夫に工夫を凝らせしなれば、その志の殊勝さに免じて、御
覧なすつて、お褒めなすつて、お購ひなすつて下さらば、
夫れで我等の願ひは足るなり

文芸記者一同かしこまつて白す

「口上」では、機関誌発刊の理由は、大阪文芸会の会合にお
いて「折角あれほどに調べたものを、一夕の空談に流すは惜い
ものだ」として発案されたというが、既に「なにはがた」が明
治二十四年四月に浪華文学会より発刊され、また同年七月には
尾崎紅葉につながるのがある硯友社系統の雑誌である「葦分船」
が発刊しているのを考えると、これらの雑誌を意識して、「大阪
芸」が発刊されたことは想像に難くない。

「大阪芸」の創刊当時の会員数は三十七名で、主要メンバーは
香川蓬洲、宇田川文海、久津見藤村、木内愛溪、大久保夢遊、
竹柴諺藏などである。また、尾崎紅葉らとともに硯友社を興し
た丸岡九華もいた。さらに、四号からは菊池幽芳が加わってい
る。その顔ぶれは、新聞関係者だけでなく、漢学者や漢詩人、
歌舞伎狂言作者、画家と幅広い。

それゆえか、「大阪文芸」に掲載された記事も、論説、小説、随筆、伝記、歴史談、史伝、紀文、院本、脚本、人情話、落語、漫筆、謡曲、狂言、俄、漢文、和文、英詩、和歌、長歌、俳諧、唱歌、和訳と多岐にわたる。

しかし、この雑多性から、「大阪文芸」は文芸雑誌としての評価はあまり高くないようである。小島吉雄は『大阪の文芸（毎日放送文化双書10）』（昭和48年11月20日発行、毎日放送）の中で、「『大阪文芸』の内容は、〈中略〉極めて雑である」、「大阪に現在ある芸術的なものを取捨選択することなくそのまま何でもとりいれようとしている」、「『葦分船』とも通じる遊戯性は、論説のあり方ととけあわない」とその欠点を指摘しているし、明石利代も『関西文壇の形成』（昭和50年9月20日発行、前田書店出版部）で、「『なにはがた』の方は新しく盛んになってきた小説に心を寄せる者の集りとして当時の大阪での段階では純粹な文学性をもつといえるのに対し、『大阪文芸』の方は前時代的低さをも含み混沌としている」と述べている。また、『日本近代文学大事典第五卷新聞・雑誌』（昭和52年11月18日発行、講談社）でも、高松敏男が「大阪文芸」の項目で、「全体的に見て作品の水準が低いのは、会の性格そのものに親睦的要素が強く、したがって機関誌の掲載範囲も論説、小説、院本、脚本、人情話、落語、能、

狂言、俄、漢文、和文、詩、歌、俳諧と博採広蒐しすぎたためと受けとれる」と分析した。いずれの評価も、文芸というものを小説や脚本、論説に限定せず、広範囲で捉えた「大阪文芸」の性格に対する批判と受け取れる。

この点については、「大阪文芸」発刊当時から既に指摘されていた。明治二十五年二月一日発行の「なにはがた」（第十冊）で、木崎好尚が「大阪文芸」の一号から四号を詳しく批評している。次のようである。

予輩は今大阪文芸を取りて聊所見を述べんとするに当りて先づその起稿者人名なるものを検すればその員数実に四十有余名の多きを得たり。予輩は常に世の論者が現時の浪花を以て文学者その人に乏しきを歎ずるを耳にせり。然るに今本編起稿者たるもの実に思料の外に出でこの多数をもて算せられたり予輩豈一驚を喫せざらんや。されど仔細に從來の経歴に徴してこの四十余人者を点検すれば未だ遽にわが浪花文学の為に慶賀するを得ざるものあるをいかにせんいでや今真正の起稿者と称するに堪ふるもの、みに就きてその著作を検し以て文芸その物の価値を定めなん。

木崎好尚は「大阪文芸」をこのように論じ、続いて宇田川文海の小説「紅葉」、竹柴諺蔵の脚本「小督」、木内愛溪の歴史談に言及している。しかし、その他の記事については「彼の児童の遊戯団に所謂チャリボなるもの、如きに至りては固より本編の上に於て毫もその実価を増損するに足らざるなり」とも述べている。そこには「只予輩の残念に思へる節を憚りなく放言せしめんかかゝる事々しき和漢文がいかにも博採主義なればとて俄、人情話などの文学と同一紙面に参見し長短相助け高下相補ひ以て浪花文学の為に斯道の調和を計らるゝの大度量熱心に呆然たるものなり」というように、小説や脚本を文学の第一と考える木崎好尚、すなわち「なにはがた」の文学態度が窺える。さらに、木崎好尚は、明治二十五年三月一日発行の「なにはがた」(第十一冊)においても、「大阪文芸」の五号から八号を評し、「文芸と技芸とを両脚柱となしその発達進歩をして双々相均一ならしめん」とする「大阪文芸」の方針に対して、「単に雑駁なる文辞を博採廣蒐するをのみつとめて他の技芸なるもの、局面を開かず」と述べている。

また、明治二十四年十一月八日の「大阪朝日新聞」には、「大阪文芸第一二号」と題して、次のような雑誌紹介が掲載された。

●大阪文芸第一二号　は去月大阪文芸会より発兌されたりしが論説小説落語狂言端歌百々一何でも並収むる好雜誌にして印刷製本共にうつくし篇々何れにおろかはなき中に久津見氏の「大阪文学者に望む」の一篇大に気炎を吐かれたれど某氏の文を評して「いでや」とありて「ともよ」と結び告げなん申さんなど「ん」の字にて結ばざる及び「忽概嘆の至に堪へず」の句あるを難ぜし文あり同氏「いでや」は発語の辞にして掛結かくりむすびに関係なきを知らず又中古の文には「忽に嘆息に堪へず」などあるをも知らざる者と覺し尤もつとも「吾人は雅語雅文漢語漢文を知らず」と断られたれば斯かの難あるも怪しむに足らずかし猶なほ一号二号共に作者口上書の多くして本文の短かきはうるさき心地す斯かは云ふもの有触れたるおどけ雜誌にまさること無論数籌葦分船と比べて伯仲の間にしるべし兎とに角かくかくのこと如此かくかくのことき好雜誌の続々我浪華文学界に顕はれ出でしこそ頼母たのもしけれ

当時のライバル誌と言つても過言ではない「なにはがた」や「大阪朝日新聞」に、批評が掲載されたことを考えてみても、大阪の文学活動の機運が高まる中で、「大阪文芸」が発刊された意義は大きいであろう。

また、大阪文芸会の主要メンバーが記者として在籍していた「大阪毎日新聞」にも、「大阪文芸」の批評や紹介文が掲載されている。宣伝目的もあるうが、個々の作品について詳しく述べてあるものもあるので、参考までにそれらをすべてあげておく。

〈明治24年11月1日付〉

●大阪文芸

西の屋ひがし

出でたり出でたり大阪文芸会の機関雑誌として『大阪文芸』は出でたり世上の好評頗ぶる高くして苟も文学技芸の心掛あるものは寄ると障ると其の批評に日を暮さざるはなし今我同好二三の子の批評を記して貴社に投ず貴社幸ひに余白を惜むなかれ

表紙の体裁 余り好しとは申し兼ねたれど先づは無難なり強ひて云へば趣に乏し併し下品ならざるは流石に蓄齋子の意匠感服と云ふの外なし

口上 六つかしく出るかと想ひの外、出たは出たは最も洒落に最も滑稽に又最も優しく出たり之ではその志の殊勝さに免じてお購ひなさらないとおつしやる御人は天下広しと雖ども恐らくはあるまいと存するなり

文学者の目的 之は亦驚いたり口上の優しさに引替へて然

り而して、豈夫れ然らんや、の新聞論説然たる御説法、文学上の説に論理学上の学語を列べた工合などはチト肩が凝たり尤も之は藤村居士の癖で動もすればビダンチツクの風があるはイヤハヤ恐れ入り奉つる併し所説は至極御最も、唯末節が云ひ足らぬやうなり今少し詳密説かれたし僧天海及び徳川氏の初世 是れ愛深木内君の大文字未完にして全部を見る能はざれば未だ俄かに評し難しと雖ども能く探り能く推し之を全体より見れば徳川初世の政略、之を部分として見れば天海と家康の人となりを見るに足るが如し併し前口上の歴史論東洋の歴史家を罵り去つたる所は好けれども愛深子の歴史の哲学は果して何れにあるや歴史を編むのクライテクランは事実の蒐集考証を主とするにあるか文明史流に原因結果の推論を主とするにあるか予の言に依ればどうやらハラム流の議論史にあらざれば歴史でないかのやうなり去りとは偏見にはあらざるか否や序に申す子の文に彼等使ひの荒いは閉口く

紅葉 病氣々と遁口上を前に置いて先づ批評家の口を縫はうとせられたは是れ浪花の文学界に斬然として頭角高く聳えたる宇田川文海翁なり然れ共批評家は決して其遁口上で以て口を縫る、者には候はず併し御病氣に似合はぬ御

筆鋒翁が許多の作中最も傑作なりとの評は下し難けれども去り迎下作には非ず文章は例の流儀と異ひ太平記調との御心得ならんが折々地金の現はれるは仕方のないもの、全幅を見ざれば未だ妄りには云ひ難けれども先づは結構なり但し此の編の末尾に又潜然と涙を流しぬとあるは勇猛無双の名を得たる児玉三郎にしては余り泣き過ぎはせまじきやとの評あれど凡そ物語の実地を云へば語者先づ結局までの事を心中に描くを常とす左れば悲哀の結局なれば語るとき先づ初めに大いに泣き終りにも又泣くなり殊に三郎がこの場の如き故中将どの、ことを想ひ出でたる所ろ、潜然は愚かなこと慟哭するも尚ほ可なり芝居流浄瑠璃風に物語の初めに少し泣き語るに従つて段々と泣く度を競上りて行き終ひに—大落とか唱へて—どつと哭いて今までの溜涙を一度に押し流すは実地にあらず去ればこの所当編中尤も意味深き所作者注意の至れる所なりと云ふべし

〈明治24年11月3日付〉

●大阪文芸第二号 は広告の通り昨二日東区道修町二丁目と同社より発売せり、木内愛溪氏の僧天海と徳川氏の初世(歴史談)、竹柴諺藏氏の小督(脚本)、宇田川半痴氏作

桂小文枝述の守護神(人情話)等は完結を告げ、宇田川文海氏の紅葉(小説)奥村榎兮氏の株式王(小説)鈴木真年氏の思ひ出るまま(随筆)丸岡九華氏の糸萩姫(小説)等は追々佳境に進み、別に久津見藤村氏の大坂の文学者に望む(論説)大川北邨氏の花は紅(落語)金子静枝氏の義士密謀の旧地(記文)久保田蓬庵氏の菊屋(謡)田村千歳氏のひげ薬(滑稽小説)羽山菊醉氏の歌解(漫筆)亀一山氏の近飛鳥の記(和文)宇田川半痴氏の千代の秋(唱歌)小塊訳の英詩及び俳偈、一口噺、雑報等あり体裁益々整ひ之を一号に比すれば又一層の好雑誌となれり、一読の上批評することあるべし

〈明治24年11月8日付〉

●大阪文芸(つゞき)

西の屋ひがし

脚本小督 是れは当地狂言作者の巨擘竹柴諺造子の高作なり其の拠る所は謡曲の小督にして台詞其の他共之に拠られたる所少からず最も優美に又最も情緒に富みて中々に善し左れど謡曲の小督からして文章幾んど語をなさぬ所あるをソツクリ丸取りも同様にしたれば肝腎の小督の台詞の中にも語をなさぬ所多く此処は作者の改むべき所なるを心付

れざりしは残念く、又仲国の台詞の中に「琴弾く者も仲国が最早尋ぬる方もなし」云々とあり之は健気な八つや九つで「云々又は「之れぞ尺八煩惱」云々と同様にて掛りたる言葉なるべけれども地口めきて面白からず斯様に無理無体に引掛くる言辞は以後の脚本院本等には廃たきものなり序に申すこの脚本初めに「一セイノ山嵐にて幕開く」と記し夫れより謡曲になり「浅黄幕を切つて落す」とありて本舞台云々の道具が飾付あることを記したる上句の果又「この見得月の明り雁の声好みの合方にて幕開くとあり吾人は劇場道を知らねば妄とは云へねど竹柴子の芝居にては幕を二度開けさするものにや

秋の蝶 香川蓬洲子が滑稽の才あることは誰れも許す所殊に本篇は中々の傑作評者も腹の皮をよいたり髭の塵はらひに次ぐの好評なり去れど或る人は云ふ蓬洲居士の作としては称しがたし第一鳶田で信仰記の鳶田のことをなし照八を輝若に使ふなど俄の法律にあるまじきことなり又浄瑠璃も「オ、こゝに鮓がある、と帛紗押あけ両手に」と文語つたのではボケが「ア、コレく無茶しいなでへ云々」とは出られず左れば余人ならばイザ知らず斯かる事は百も承知二百も合点といふ蓬洲居士の作としては感服いたされずと此

の評の当否は吾人之を知らず兎に角面白いものと存ぜり併し欲を云へば髭の塵はらひにせよ秋の蝶にせよ其の滑稽は形而下にして精神に乏し左ればユーモアの上乗に達するやう御勉強ありたしと想ふのみ

守護神 之は宇田川半痴先生の作にて当時落語家の人気取り桂小文枝の話せるものを当地の速記者中錚々の聞え高き友野莊次郎子の速記したるものなれば作と云ひ話振と云ひ速記と云ひ三拍子揃ひも揃つたる至極結構なものなり話の筋は未だ結局に至ねば評しがたけれども汽車の中でこそくと美人と安太郎の様子を噂して羨ましがる所などは甘いものなり併し言辞が東京やら大阪やら分らず何んとなく心悪いやうで嫌味なやうで聞きイヤ見苦しきが瑕瑾なり

糸萩姫 此は都の花の初め東都の文学雑誌に於て紅葉、露伴など、並び立つて高名を掲げたる丸岡九華子の筆に成れるものなるを今度西の文園に移し植ゑたるにて姿も優しく花も美しき糸萩姫となん称し玉ふ御方の物語にぞある姫の御性質も御動作も未だ真の端緒なればチラと御姿を拝みたるまでにて窺ふに由なければ評も奉らんは嗚呼の業なり但し文章の優れて美しきは感服の外なけれども斯かる王候

貴人のことを写す真中に「鏢一文以下、げに此王の徳さこそと思やらるゝ」までの間の文句其の他折々下品なる文句あるは何事ぞ設令ば糞と味噌とを一所にするものではござらぬか物には貴賤上下取り合せのある者御注意あらまほし月見 後の月の記とも併せて久保田蓬庵子の和文なるが二つとも中々に面白う出来たり取り分け後の月を善しとす其は月見の記は客観にして唯見たる様のみ写すことを勉めたれば意に乏し後の月は稍や主観にして胸に想ふことを記したれば意充ちたるを以てなり子は未だ世にも人にも多く知られざる人なるに斯くまで優にやさしき文か、んとは、土中に埋れたる玉の如しこの月見の記と共に世に光りを放たんこと鏡にかけて見るが如し但し欲を云へば斯く万有を觀て其の感想を描くに当りては一種の理想—譬へばウヅウヲルスが万有を以て活物とし其身とし万有の生命、万有の言語、万有の性情、万有の方向を愛すること其の妻其の妹を愛するが如き一種の哲学—を蓄へ月に花に之を現はされたしと想ふのみ併し之を子に望むは少しく無理なるべきか

御門菊の記 七艸菴龜一山先生と云へば苟も俳偕発句を好むものは誰れ知らぬ人もなかるべく殊に先生は世のデモ

俳人と異り最も文章に巧みなればこの記の優れて善きことは云ふまでもなかるべきが俳文「中至極御尤といふの外なし」とはチト耳立ちて聞えたり其の他の歌俳句共に悪からず但し蓬菴子の所にも云ひたれど歌も俳偕も万有と人に対して云ひ出づるものなれば一種高尚なる理想は是非とも含みたきものなり

扱て之にて大阪文芸の批評も大略は終りたり俳句雜報は評するに及ばねば云はず唯云ひたきは一口話しにてこの話最も面白し今の女学生あがりの奥方さま方は定めし之には冷汗なるべし之を要するに大阪文芸は実に種々のものを詰め込みたる雜誌にて悪く云へば塵埃料理と云ふ景色なれど味ふて見れば中々に味もよい滋養にもなり安価でもあり至極結構なものなり何卒其の寿の万々歳ならんことを祈る

(完)

〈明治24年11月27日付〉

●大阪文芸二三号妄評

西の屋ひがし寄稿

大阪文芸会の機関雜誌にして凡そ文芸上に関する事は何んでも彼でも詰込むといふ主義の面白雜誌之で世間の人々が読まなければ先が無理だと云ひさうな好雜誌、大阪文芸は

去る二日に二号を出し又去る十六日に三号を出したり何に
 が扱て発兌の当日を欠さず印刷美麗に製本立派、挿画は
 年恒峯の両子が丹精を凝らしたものなれば一寸と見るから
 惚気の指す体裁なり誰れか之を読まざらん誰か之を買はざ
 らんや吾人も発兌早々悦んで買ふて見たれば早々に批評を
 試る筈なりしが余り面白いのに見取れて居た為に今日まで
 の延引、遅滞ながら一号を評した縁故もあれば簡略爰に
 評言を呈すべし扱て木内伊之介君の（僧天海と徳川氏の
 初世）引証確實推論精緻、愈々佳誰やらが評して史眼炬の
 如しと謂ふとも蓋し過誉に非る也と云つたは誠に適評一点
 の申し分なし唯苦情を申せば文中註脚の多きに過ぐるに
 あり斯かる註脚は本文に書入れられ得べきやうに想はる、
 が如何にや、久津見藤村子の（大阪の文学者に望む）是れ
 亦一種気概ある文章、大阪の文学者は一読三省必ず深く鑑
 みざる可らず三号に於ては子（演劇の改良に就て）論ずる
 所あり未完なれば完結を俟つて評せん宇田川文海君の
 （紅葉）三号にて完結となれり最も悲哀最も断腸而し能く
 古の武士の根性を写せり斯かる御家物は君が得意とは云
 ひながら全編読み来りて之を想へば先に余り傑作にもあら
 ずと云ひたるは吾人の誤りなることを知れり文章も太平記

調にて益々佳、殊に「イデさらば高野の山に分登りて、峯
 の嵐に名利の夢を醒し、谷の水に業障の垢を洗ひ、恋慕の
 迷ひを渴仰の悟りに換へ候はん」云々の結句最も妙なり
 竹柴諺蔵子の（小督）流石は餅屋は餅屋なり一鉦の拍子幕
 といふ所まで読み去つて之を見れば面白いこと云ふ可らず
 三号に御顔の見えぬは大遺憾なり、奥村柁兮子の（株式王）
 三号に至るも未だ完結に至らねば評せず併し総山統一の考
 へ通り両庭とやらにて果して儲かるものにや若し之が甘
 く行くものならば世に相場で財産をつぶすものは恐らく大
 馬鹿者の外にはあるまじと想はる、が如何なものにや鈴木
 真年翁の（思出るまゝ）二号には小鼓の話、謡のはなし三
 号には大阪は文学の元国なる事算術の由来を載せらる共に
 考証精確にして音に其の道の人のみならず広く世人の読み
 て益ある所のものなり一号の評には失敬を申したれど今度
 は敬服々々
 （未完）

〈明治24年11月30日付〉

●大阪文芸二三号妄評（つゞき） 西の屋ひがし妄評
 大川北村子の（花は紅）落語とは妙なものを書れたり併
 し微醉楼主人と名乗り出で、初めて文学界へ入られた頃よ

り見れば御腕力の上つたこと、実に驚いたものなり殊に当篇の人物翠柳も序作も古しの粹な且那少洪の幫間を写し得て妙々蓋し三馬も裸足なるべし唯惜むべきは花は紅といふ題目なり如斯では落が前から知れさうで悪し犬の川端とか何んとかありたし斯は云ふもの、二号三号の内にて之れほど洒落な之れほど意気な之れほど粹な之れほど面白いものはござるまい又子が圧巻を占められたやうなり丸岡九華子の(糸萩姫)一号二号と拝見仕つた所にては如何しても滑稽小説とは請取れ申さず三号に至つて御自身の御口上を承はつてハ、ア、成る程、でげしたとか初めて感服仕つたりイヤ閉口頓首百拜千拜して以て一号の妄評を謝し奉つる以後は決して全篇を拝見仕つらずして妄評を致す杯の失敬は誓つて仕つるまじ併し滑稽小説として扱て再度拝見すれば其面白さ加減を笑さ加減といふものは得も云はれず三号最も佳金子静枝子の(義士密謀の旧地)是れ京都文学一方の旗頭たる金子錦二君の筆になれるもの二号三号にして未だ完結に至らねば妄に評しがたけれども能御調べの届いたもの吾人義士好の戴いて読むべき所なり但し長政候を紀伊国の人なりと云はれたるは如何に、紀伊は候が移封の地にして出生の地にはあらずと覺えたるが如何にや

(守護神) 既に一号の評にも云へる如く宇田川半痴先生の作で桂小文枝の話したるを友野莊次郎君が速記したものなれば誠に三拍子揃ひも揃つて結構至極誰れか之を讀で感心せぬものはないといふ保険付の人情話なり但し惜いことには娘の懺悔の際がチト力が足りぬやうなり去れど「心だに真の道に適ひなば祈らずとも神や守らん」の歌の意を取り宜くも作り宜くも話し宜くも速記したものと感服敬服平服せざるを得ず久保田蓬庵子の(苺屋、佐久間玄蕃女、長歌)是れ二号三号に出でたる子が優麗高雅の文章なり苺屋は謡曲にして其の道の人に就て校訂したりとあれば勿論謡ふことを得べく又舞ふことをも得べければ申分なき謡曲といふべし殊に道行にて「月の都を立出て、鶉鳴くなら深草や云々以下数行の文章最も佳「シテ」「ワキ」の問答も頗ぶる佳併しワキの詞に「未だ河内路を見ず候程に云々河内路とは少しく耳立ちて聞ゆ御再考を仰ぎたし、佐久間玄蕃女の事を記されしも佳殺伐の世猶ほ戦鬪の公事と嫁娶の私事とを辨へたる美風ありしを童蒙婦女に知らしむる有益の文章と云ふべし長歌二首三神寶と帰化人となり文は優にやさしくして佳けれど意に至りては吾人感服仕らず吾人は子に望む斯の優れたる文を以て宇宙万有内外各国の実

情実相の美を写されんことを、田村千歳子の（ひげ薬）滑稽小説と名乗りかけて出られたれば兼て腹の皮のよじれぬ用心をなし腹にウンと力を入れて笑ふまじと力んで読みたれど「見るがうちに鼻の下へ八字髭生ぬ」と来たときには最早や耐らず抱腹絶倒いたしたり唯惜むべきは出過娘の出過やうが少し足ざるやうに想はるゝの一事なりこの娘は充分に生意気におきやんに御転婆に女学校卒業生の弊を写れねばひげ薬の効験もあるまじ

（つゞく）

〔明治24年12月2日付〕

●大阪文芸二三号妄評（つゞき）

西の屋ひがし

（六歌仙歌の解）是れ実に現今京都に於ける文学界の明星羽山菊醉先生の筆に成れるものなり序詞に於て充分に謙遜の意を述べられたりと雖ども文章閑雅にして而かも能く俗に通じ婦女童蒙に歌の意を解せしむるの益あること蓋し少なからざるべし（阿正）是れ亦菊醉子の筆得意の文章最も面白し未だ完結に至らざれば全体の評は暫く置くべし、七岬庵主人の（近飛鳥の記）近体和文とでも申すべき一種の妙文字、スラ／＼として佳、伴林、光平大人の文の凶らずも主人の紹介に由てこの雑誌に載たるも嬉し中に記された

る国美、数子、白英、琴緒、朝安好信等諸子の歌は流石に氣韻高くして面白きが中にも橋本重年子が「見えぬ身は撫ても見たく思ふ哉玉手の山の山のけしきを」とありしは盲人の情左こそと察せられて最と憐れなり之に對して主人が「玉手山見えぬ人にも聞かすべくうつし出さん言の葉もがな」と詠れたるは愛憐の情言外に溢れ物の憐れを知る歌人は総て斯くこそあらまほしけれと想ひぬ但し「終に聞かすべきことは一言もえいひ出ずなんと」は憾みなり（千代の秋）是れは半痴居士が蘆邊踊の唱歌にとて作られたるものなれど都合に依り他の歌と作り替へられたるもの、由なるが中々に面白く出来たり過日歌舞練場にて唄ひたる居士が作の歌よりも此の方却て善やうなり小塊子訳の英詩（やしない子）原詩を見ざれば妄に評しがたけれども兎に角原書を読み得ざる人の為には英詩の臆影を窺ふに足るものなるべし夢遊居士の（院本空蟬）院本としては兎に角云ふもの、尋常小説として見れば頗ぶる佳殊に三号に於ては稍や佳境に入りたれば一読の価値は慥かに之あり、多田垂羅軒子の（門づけ）未発端なれば妄に是非の評は下しがたけれども父章瀟洒にして頗ぶる佳殊に孫右衛門がお蓮を後妻に娶りたる後の状態を写して「日々変りゆく父親の身

持ち浅間敷、明暮にお貞くと愛しがられし声の、今はお蓮ととかはりて、また日脚の高き内より、取り膳での小鍋立、二人さし向ふて、さしつさ、れつ、助けつおさへつ、果てはよれつ紛れつして、執固い痴話の多ぶくろしき云々能くも淫婦に感ひたる男子の状を写し得たり吉本秋亭子の(憂き船)是れ又瀟洒斬新の文章全篇の評は未だ下しがたけれども其の一回を見たばかりでも才子の文字たることを知るに足れり比丘尼の船舷に愁然として立つたる様を不審しみて色々な想像を廻らした末「詰らぬことに心を碎ひて僕は何時か胸に半鐘、ハット逆上せて頭脳は火事、火元の比丘尼は素知らぬ顔」など中々落洒た文字なり殊に一度比丘尼に尋ねて無情云はれ尚ほ好奇心のやみがたくして再度問ふて始めて比丘尼の物語を聞くことを得るなどは意匠慘憺の所感服至極なり、落語家桂文屋作の(地震)善く出来たり花柳軒春芳子の(御祝)是れも至極面白し山本梅崖先生の漢文(贈虹雲来序)三溪、南岳、初堂、等諸先生の評現の如く意匠新警、結構齋整別に吾人の贅辞を呈するまでもなく関心妙腕誠に好趣向、満紙之が為に重きを致す敬服々々此の他俳句一口話雑報等は別に評なし但し二号までは俳偕とあつて俳句のみなりしを三号には一山其祥両子の

俳偕を掲げられたるは善し、之を要するに此の冊子小と雖ども千紫万紅百花爛漫読去り読来りて興味溢然浪花文学の粹を集め得て妙なり此の他二三の文学雑誌ありと雖ども誰れか此の上に行くものあらん誰れか此の足元にだも及ぶものあらんや (をはり)

〔明治24年12月8日付〕

●大阪文芸 第四号には鈴木真年翁の、高野聖因縁物語といふ、高雅凄腕なる読切物語と、菊池幽芳君の、片輪車といふ清新奇情なる読切物語と東京の文学界に於て若手の利者、俳優の成駒屋福助に譬へられし、井上笠園君の大日坊といふ、豪放爽快なる新小説、竹柴諺藏君の藤房といふ、優美濃艶なる新脚本、宇田川文海君のみめよりといふ能く人情の微を穿つた人情話などありて、益々佳境に進めり、猶詳細なる批評は追て試むることあるべし

〔明治24年12月24日付〕

●大阪文芸 第五号は一昨日大阪文芸社より発行したり同号には世の批評に答ふ(久津見藤村)美術と云ふことに就て(牧鶴城)糸萩姫(丸岡九華)門づけ(多田垂蘿軒)

空蟬(大久保夢遊)株式王(奥村柁兮)こひ争ひ(大川北邨)
室内旅行(太田焉然)及び序詞(中江兆民)藤房卿(竹柴
諺蔵)憂き船(吉本秋亭)みめより(宇田川文海作、桂
小文枝述、友野莊次郎速記)不逢恋(鈴木真年)逍遙遊、
梁惠王(久保田蓬庵)ふるさと(久保田小塊)歳暮俳詩
(福田梅兆)等を載せ挿画は稲野年恒、筒井年峯の両氏

〔明治25年2月11日付〕

●大阪文芸 第八号には久津見藤村氏の病犬論者に一言すと
題し葦わけ船の柯亭氏の駁論を反駁したる痛快の文字あり
井上笠園子の大日坊、吉本秋亭子の憂き船、多田垂羅軒の
門づけ、はこゝに完結を告げ、千石華洲子の哥列維物語は
漸やく佳境に進み、宇田川半痴翁はズツと目先を変へて
空析と云へる狂言をつゞり鈴木真年大人の物茂卿は頗ぶ
る耳新しきを覚え其他奥村柁兮氏の脚本咲也此花顔見勢、
久保田小塊氏の和文土佐日記忘考及び久保田蓬菴翁の和
文あれたる家の春の月、山本梅屋翁の漢文自娛小文序武田
桃香氏の短篇小説藤澤等あり挿画は年恒年峰の両氏にして
類集宜しきを得て篇々皆誦すべし

「阪文芸」をはじめ、大阪で発行された文学雑誌は中央でも無
視できなくなつていたようで、明治二十六年三月三十一日発行
の「文学界」(15号)の「新刊雑誌紹介」欄の「小文壇第一号」
の評の中には、次のようにある。

浪速の文界既に「葦分船」あり「大阪文芸」あり今又「浪
花文学」に加ふるに此「小文壇」あり、大阪の華城文学会
より出づ、本号に於ては以上浪花の三雑誌の批評などに忙
しくてや、未だ其創作文章に於ては著しきを見ず、あなぐ
るに傾きて燥しきに陥りはせずやと氣遣はる、所なきにあ
らず又体裁も整ひたりとは云ふべからねど自ら恃む所あり
て出でたればにや氣焰のこゝかしこにはの見ゆるあり

「葦分船」や「浪花文学」とともに、「阪文芸」の名も挙がつて
いる。「新刊雑誌紹介」では、これら大阪で発刊された雑誌につ
いて、「あなぐるに傾きて燥しきに陥りはせずやと氣遣はる、
所なきにあらず又体裁も整ひたりとは云ふべからねど」と危惧
しながらも、「自ら恃む所ありて出でたればにや氣焰のこゝか
しこにはの見ゆるあり」とその将来に対する期待も示してい
る。

このように大阪の文学活動の発展を囑望されながらも、「大阪文芸」は八号で短い生涯を終えたようである。発行された期間は、約四か月であった。

「大阪文芸」の廃刊の理由を、小島吉雄は『大阪の文芸（毎日放送文化双書10）』（前掲）の中で、「大阪文芸」に関わった者のうち、真に文芸を理解し、黒幕的存在として牛耳っていたのは木内愛溪であつて、その木内愛溪が明治二十五年七月に大阪毎日新聞記者の海外派遣でドイツに留学してしまつたからだと推察している。「大阪文芸」の根本的欠陥である「雑な性格」は木内愛溪もよく知っていたに違いないし、脱皮への対策を考えていたと思われるが、まだ機の熟さないうちに留学という事態になり、後を託す者もいまま、廃刊したというのである。

しかし、木内愛溪が明治二十五年七月にドイツへ留学したことが「大阪文芸」の廃刊の直接の原因ではなかつたのではないだろうか。木内愛溪は、明治二十五年二月に入つても、大阪文芸会に属し、例会に参加していた。明治二十五年二月二十九日の「大阪毎日新聞」の記事には、次のようにある。

●文芸会例会 一昨夜例の通り備一亭にて開きたる大阪文芸会の景況を聞くに当日の来会者は大久保夢遊、貫名駿

一、華本安次郎、同子息、亀一山、久津見藤村、大川北郎、吉本秋亭、杉山安次郎、日野国明、宇田川文海、樋口舟升、鈴木真年、荒川完、三輪経治、菅沼貞吉、浅田定次郎、山崎茂、香川蓬洲、菅原喜一郎、野口茂平、大西亮太郎、橋本清則、徳崎安三、川上猶次郎、西田虎三、小山春芳、奥村柁兮、歌川国峰、米浪常七、木内愛溪、芝橋考、稲野としつね、貴島清、斎藤又一、石田栄吉、竹内直次郎の諸氏また俳優にては市川左團次、片岡我當、中村寿三郎、市川米蔵、片岡我蔵の市川伊左三諸文落語家では桂小文枝丈等四十余名にして曾て前号にも記せし如く会員徳崎、木内、久津見、亀、鈴木等の諸氏交々に得意の談話あり夫より華本の子息は仕舞を奏で次には余興として例の福引等の趣向ありて散会せしは十二時頃なりと

この記事が掲載された「一昨夜」、すなわち明治二十五年二月十七日の夜に開かれた大阪文芸会の会合の出席者に木内愛溪の名前が見える。つまり、「大阪文芸」が発行されなくなつてからも大阪文芸会は存続していたし、木内愛溪も会に参加していたのである。したがつて、木内愛溪が明治二十五年七月に留学したことを「大阪文芸」の廃刊の直接的な理由と見ている小島説には疑

問が残るのである。

さらに、「大阪文芸」の八号は宮内省への献上となっていたようである。明治二十五年二月六日の「大阪毎日新聞」には、次のような記事が掲載されている。

●大阪文芸宮内省の献上となる 今般大阪文芸雑誌は辱けなくも宮内省へ献上する事となりたるに依り此程同会員の久保田有恒、亀一山、鈴木真年、久津見息忠、木内伊之助、宇田川文海等の諸氏より宮内大臣へ宛謝状を差出したりと云ふ

また、明治二十五年二月十八日の「大阪毎日新聞」にも、次のようにある。

●大阪文芸雑誌 天覧を辱ふす 大阪文芸社より発売せる雑誌大阪文芸は曩きに宮内大臣へ宛奉呈したりしに御受納の榮を辱ふしたるの趣を以て股野宮内書記官より別紙を添へて同社へ申達せられたる由

今般大阪文芸会員宇田川文海以下六名より文芸草子
聖上 皇太皇 皇后三陛下及び

皇太子殿下之御覽に供し度旨を以て差出候に付伝献被致候
問夫々 御前へ差上候此段申入候也

明治廿五年二月十五日 宮内大臣土方久元
宮内書記官股野琢殿

その後、先にあげたように明治二十五年二月二十九日の「大阪毎日新聞」に大阪文芸会の活動が報告されているが、「大阪文芸」についての記事は掲載されていない。宮内省への献上という榮譽を受けたにもかかわらず、何故その後「大阪文芸」が発行されなかったのか、その理由はよくわからないのだが、やはり「大阪文芸」は明治二十五年二月一日発行の八号を以て廃刊となったようである。

第一号 明治二十四年十月十九日発行

口上	文芸記者一同	一一一
文学者の目的(論説)	久津見藤村	二一五
僧天海と徳川氏の初世(歴史談)	木内伊之介(愛溪)	五一一
紅葉上編(小説)	宇田川文海	一一一
髭の塵はらひ(狂言)	大川北邨	一八一
		二二三

空蟬 (院本) 大久保夢遊 二二一―二九

思出るま、 (随筆) 鈴木真年 三〇―三二

実業家未来記 社会破裂予言 株式王 第一回 (小説) 奥村柁兮 三二―三六

小督 (脚本) 竹柴諺蔵 三六―四〇

秋の蝶 (俄) 香川蓬洲 四〇―四二

守護神 (人情話) 作・宇田川半痴 述・桂小文枝 筆記・友野莊次郎 四三―四九

糸萩姫第一回 (小説) 丸岡九華 四九―五二

前後の日 (和文) 久保田蓬庵 五二―五四

御門菊の記 七艸庵 (亀一山) 五四―五七

俳諧 五七―五八

一口話 五八―五九

雑報 五九―六〇

挿画 挿画

勇士美人に謁するの図 (筒井年峰)、天使花を射るの図 (中

川蘆月・稲野年恒合作)

第二号 明治二十四年十一月一日発行

僧天海と徳川氏の初世 (歴史談) 木内伊之介 (愛溪) 一―六

大阪の文学者に望む (論説) 久津見藤村 六一―一

紅葉 中編 (小説) 宇田川文海 一一―一四

小督 (脚本) 竹柴諺蔵 一五―一八

実業家未来記 社会破裂予言 株式王 第二回 (小説) 奥村柁兮 一八―二二

思出るま、 (随筆) 鈴木真年 二二―二五

花は紅 (落語) 北埜邨夫 (大川北邨) 二五―二八

糸萩姫 第二回 (小説) 丸岡九華 二八―三四

義士密謀の旧地 申 (紀文) 金子静枝 三四―三七

守護神 (人情話) 作・宇田川半痴 述・桂小文枝 筆記・友野莊次郎 三七―四二

苜屋 (能) 久保田蓬庵 四二―四五

ひげ薬 上 (滑稽小説) 千歳子 四五―四八

歌解 (漫筆) 羽山菊醉 四八―五一

近飛鳥の記 (和文) 七艸庵主人 (亀一山) 五一―五五

千代の秋 (唱歌) 宇田川半痴 五五―五六

英詩 訳・小塊 五六―五八

俳諧 五八―六〇

一口話 六〇―六〇

雑報 六一―六一

挿画 挿画

二四二

仲国嵯峨野に小督を尋る図(稲野年恒)、才子農家に美人を
慰る図(筒井年峰)

第三号 明治二十四年十一月十六日発行

演劇の改良に就て 久津見藤村 一―六

義士密謀の旧地 乙(記文) 金子静枝 六―九

糸萩姫(小説) 丸岡九華 九―一五

阿正(伝記) 羽山菊水 一五―一九

思出るまゝ(随筆) 鈴木真年 一九―二一

空蟬(院本) 大久保夢遊 二一―二三

花は紅(落語) 北野村夫(大川北邨) 二三―二七

門づけ(小説) 多田垂蘿 二七―三一

ひげ薬 下(滑稽小説) 千歳子(田中千歳) 三一―三三

実業家未来記
社会破裂予言株式王 第三回(小説) 奥村柁兮 三三―三八

紅葉 下編(小説) 宇田川文海 三八―四三

佐久間玄蕃女(史伝) 久保田蓬庵 四三―四六

憂き船 壹(小説) 吉本秋亭(残菊) 四六―五〇

地震(落語) 桂文屋 五〇―五〇

御祝 花柳軒春芳(小山春芳) 五一―五一

近飛鳥の記(和文) 七草庵主人(亀一山) 五一―五五
贈紅雲来序(漢文) 山本梅崖 五五―五六

長歌 久保田有恒 五六―五七

俳諧 五七―五八

一口話 五八―五九

雑報

挿画 烈女一室に死を決するの図(稲野年恒)、勇士怒に乗して舅
嫁を祈るの図(筒井年峰)

第四号 明治二十四年十二月七日発行

演劇改良に就て 久津見藤村 一―七

大日坊 上(小説) 井上笠園 七―一

藤房卿(脚本) 竹柴諺造(諺蔵) 一一―一五

高野聖因縁譚(説切物語) 鈴木真年 一五―二〇

糸萩姫 第四回(小説) 丸岡九華 二〇―二四

阿正(伝記) 羽山菊水 二四―二七

憂き船 弐(小説) 吉本秋亭 二七―三〇

義士密謀の旧地丙(記文) 金子静枝 三一―三三

みめより (人情話)

第五号 明治二十四年十二月二十一日発行

作・宇田川半痴 述・桂小文枝 筆記・友野莊次郎 三三―三七

空蟬 (院本)

大久保夢遊 三七―四二

門づけ 第二、三回 (小説)

多田垂蘿 四二―四七

題龍門之凶 (題詞)

亀一山 四八―四八

片輪車 (読切小説)

菊池幽芳 四八―五二

地震 (落語)

桂小文枝 五二―五五

菅廟猷咏詩跋 (詩文)

山本梅崖 五五―五五

訪隠者 (和文)

久保田蓬庵 五六―五七

蜘蛛 (長歌)

伊達 (安達) ちひろ 五七―五八

序・久保田蓬庵

甲斐源氏 (長歌)

久保田有恒 五八―五八

歌俳諧

五九―六一

批評

六一―六二

〔勅諭修身経階梯〕〔勅諭修身経読本〕〔勅諭修身経詳解〕

〔国民修身談〕

雑報

六一―表紙3

挿画

入道涙を吞んで二子に別る、凶 (稲野年恒)、龍門の凶 (亀

一山)

世の批評に答ふ (論説)

久津見藤村 一―六

美術と謂ふことに就て (論説)

牧鶴城 七―九

糸萩姫 第五回 (小説)

丸岡九華 九―一五

門づけ 第四、五回 (小説)

多田垂蘿 一五―二〇

空蟬 (院本)

大久保夢遊 二〇―二三

実業家未来記 株式会社王 第四回 (小説)

奥村柁兮 二三―二八

こひ争ひ (読切小説)

大川北埜 (北邨) 二八―三二

編室内旅行 (寓意小説)

太田焉然 三二―三五

藤房卿 (脚本)

竹柴諺造 (諺蔵) 三五―三九

憂き船 第三回 (小説)

吉本秋亭 三九―四二

みめより 第二席 (人情話)

作・宇田川半痴 述・桂小文枝 筆記・友野莊次郎 四二―四八

不逢恋 (物語)

鈴木真年 四八―五四

逍遙遊 (漢文和訳)

久保田蓬庵 五四―五五

梁惠王 (漢文和訳)

久保田蓬庵 五五―五六

ふるさと (新体詩 (英詩))

久保田小塊 五六―五六

歳暮俳詩

福田梅兆 五七―五七

全 和韻

久保田蓬庵 五七―五七

七拾六番歌合のおくに書つくる詞 弾琴緒 五七―五七

詩歌俳句 五八―六三

批評 六四―六四

〔早稲田文学〕

雑報 六五―六六

挿画

阿貞三子を携へて火災を脱るゝ図 (稲野年恒)、重衝千手と

合奏するの図 (筒井年峯)

書

室内旅行題詞 (中江兆民)

第六号 明治二十五年一月四日発行

新年の辞 一―一

美論抄 第一 (論説) 久津見蕨村 二―六

書作るわざ (和文) 久保田小塊 六―八

義士密謀の旧地 丁 (紀文) 金子錦枝 (静枝) 九―一四

憂き船 第四回 (小説) 吉本秋亭 一四―一六

本邦の文芸は神世に権輿せる説 鈴木真年 一六―二〇

大日坊 中 (小説) 井上笠園 二〇―二三

編 室内旅行 第二 (寓意小説) 太田焉然 二四―二七

門づけ 第六回 (小説) 多田垂蘿軒 二八―三一

哥列維物語 訳・千石華洲 三一―三五

藤房卿 (脚本) 竹柴諺造 (諺藏) 三五―三九

檜梅 上 (小説) 宇田川文海 三九―四三

実業家未来記 株式王 第五回 (小説) 奥村柁兮 四三―四九

社会破裂予言 雛鷄瓢記 (漢文) 山本梅崖 四九―五〇

やんごとなき家の初春 (和文) 久保田蓬庵 五〇―五一

新羽衣 (落語) 桂文枝 五一―五四

七福神 (落語) 述・桂小文枝 五四―五五

親子喧嘩 (落語) 述・桂文星 五五―五六

月ざらへ 述・桂文星 五六―五六

和歌 五六―五七

俳諧 五七―五七

狂歌 五七―五七

雑報 五七―五八

挿画

岩戸開之図 (亀一山)、鳳鳴鸞舞の図 (稲野年恒)

附録

三木村甚五左衛門 丸岡九華 一―七

子 鼠の新年

久津見藤村 七―七

藤房脚 (脚本)

竹柴諺藏 一四―一八

丑 滑稽
脚本 変作春露雨影桜

香川蓬洲 八―一二

昔男 (物語)

久保田蓬庵 一八―二二

寅 雷さまの特鼻禪

吉本秋亭 一二―一三

獅子舞 (演史)

鈴木真年 二三―二五

卯 佐栗當

木内愛溪 一三―一五

初陣 (小説読切)

武田柳香 二六―三一

辰 辰

久保田蓬庵 一六―一六

糸菘姫 第六回 (小説)

丸岡九華 三一―三七

巳 似而非佛

奥村柁兮 一六―十九

松の雪 上 (小説)

北埜邨夫 (大川北埜) 三七―四一

午 御馬説

山本海崖 (梅崖) 一九―一九

槍梅 下 (小説)

宇田川文海 四一―四五

未 ひつじかひ

宇田川半痴 一九―二三

鶯宿梅 (小説読切)

梅野花子 (菊池幽芳) 四五―六〇

申 三疋猿

亀一山 二二―三一

新喜多巨石記 (漢文)

山本梅崖 六〇―六〇

酉 酉

鈴木真年 三二―三三

題呉王夜宴図 旧作 (漢文)

山本轍 六〇―六一

戌 白犬の初夢

千歳子 三三―三四

新年文宴 (詩)

奈良松嶂 六一―六一

亥 亥

北野邨夫 (大川北埜) 三四―三五

日出山 (小謡)

大西亮太郎 六一―六一

附録挿画

和歌俳句

六一―六六

飛龍沖天之図 (鈴木松年)

雑報

六六―六七

社告

六八―六八

第七号 明治二十五年一月十八日発行

挿画

業平東下り及望月の図 (亀一山)、美人梅を折るの図 (歌川

美論抄 第二 (論説)

久津見藤村 一―三

国峰)

月の名考 (考証)

吉岡花子 三一―五

編 新室内旅行 第三 (寓意小説)

焉然居士 (太田焉然) 六一―一四

行兼鬼に遇ひし事 (行兼五節の学びする事) (漫録) 六〇一六一

忠義の意義 (蟻と云ふ文字の起りの事) (漫録) 六一一六一

雑報 六一一六五

病犬論者に一言す (論説) 久津見藤村 一―四

大日坊 下 (小説) 井上笠園 五―七

哥列維物語 上篇 千石華洲 八―一三

松の雪 下 (小説) 北野邨夫 (大川北邨) 一三―一七

空祈 (狂言) 宇田川半痴 一七―二〇

憂き船 五 (小説) 吉本秋亭 二〇―二一

咲也此花顔見勢 (脚本) 奥村柁兮 二二―二六

思ひ出るまゝ (物茂郷) (隨筆) 鈴木真年 二六―二九

土佐日記意考 (和文) 久保田小塊 二九―三四

藤澤 (短篇小説) 武田柳香 三五―四三

編室内旅行 第三 (寓意小説) 焉然居士 (太田焉然) 四三―五〇

門づけ (小説) 多田垂蘿軒 五〇―五六

あれたる家の春の月 (和文) 久保田蓬庵 五六―五六

歌と俳諧の別 (和文) 吉岡花子 五七―五八

山寒分韻 (詩) 山本竹溪 五八―五八

自娛小文序 (漢文) 山本梅崖 五九―五九

聖廟図跋 (漢文) 奈良松嶂 五九―五九

題尾濃地震図 (漢文) 森檜山 五九―五九

挿画

義士節婦孝子の図 (稲野年恒)、列女冤家に迫る図 (筒井年

峰)

(あらい まりあ / 本学非常勤講師)